

## 神様の前で生きる

サムエル記上24章1～23節

2022年5月15日

松田 基子 師

神様は、ご自身が造られたこの世界を、更に麗しくするために、人間を創造されました。神様は、人間と愛を築いて行く事で、その目的を果たそうとされました。ところで、愛と言うのは、その人の自発性から発していなければ、愛とは言えません。そこで神様は、愛する人間に、人間も神様に愛を以て答えてくれる事を願われ、人間に自由意志をお与えになりました。ここに、神様は、

『人間が神様を愛し、敬い従って生きるの

か、自分の考えで自己中心に生きるのか』

人間の意志に委ねられたのです。

人間にはその、どちらかの生き方しか、ありません。ところが、人間は、神様から人間を引き離そうとする、サタンと呼ばれる誘惑者の言葉に心惹かれて、

『神様に従って生きるよりも、自分の思い

通りに、自己中心に生きることの方が、

自由で楽しい生き方が出来る』

と、思い込んでしまいました。人間にとって、

『自己中心と言うのは、如何にも

人間が自立した生き方に思える』

のですが、真相はサタンに結ばれてサタンに従っているのです。

サタンは、人間にはそれが解らない様に誘惑して、自分に結び着けています。人間は神様に結ばれるのか、サタンに結ばれるのか、そのどちらかの生き方しか出来ないのです。

そこでは、人間は、選び取る自由は与えられています。その結果からは、自由ではありません。その事は全人類に問われています。聖書はそのことを教えています。今朝は、神様の前に**対照的な生き方**をした、**サウルとダビデ**の生き方から、その事をしっかりと受け止めたいと思います。

イスラエル最初の王、サウルは、神様に選ばれ、神様からの使命を果たす様に、サムエルから油を注がれて、王位に就きました。しかし、サウルは、神様に信頼する心を持たず、目の前の状況、周りの意見に流されて、行動しました。そんなサウルの生き方から、ペリシテ人との戦いは、苦戦を強いられることが、目に見えていました。ところが、そこに少年であるにも拘わらず、神様に、絶対的な信頼をおいて、神様の力で勝つ事が出来ると、確信する、ダビデが現れました。彼はペリシテ軍、最大の戦士ゴリアトと一騎打ちをする事になり、ダビデは、自分をからかって軽んじた巨人ゴリアトを、見事に倒してしまいました。

そこからイスラエル軍は奮起して、ペリシテ軍に勝利する事ができました。そんなダビデをサウルが重要視しない筈がありません。

ダビデはそのままサウル王に召し抱えられました。ダビデはまた、豎琴の名手であった事から、サウルが悪霊に悩まされますと、豎琴で慰めました。ダビデは、サウルが派遣する度に、出陣して、勝利を収めました。そのダビデが凱旋して帰ってくると、女性達は、樂を奏し、

「**サウルは千を討ち、ダビデは万を討った**」

と歌い交わしたのです。それを聞いたサウルは、激しく怒り、ダビデに嫉妬しました。

サウルはダビデに殺意を抱きました。心が乱れた時、豎琴で、サウルの心を鎮めようとするダビデを、槍で突き刺そうとしたり、ペリシテ人との戦いによって、命を奪おうとしました。しかし、ダビデは愈々(いよいよ)武勲を立てて、名声は上がるばかりでした。この様なダビデに、サウルは脅威を感じ、ダビデがいる限り、自分の王位は、彼に奪われるとの脅迫感から、ダビデへの殺意は愈々強くなって行きました。サウルは神様を見上げてはいませんでした。自分の心に巣くう罪に振り回されていました。

そんな父に反して、ダビデを救うのが、サウルの息子ヨナタンです。彼はダビデに会ったそ

の時から、ダビデを自分の命の様に愛し、父サウルの心を論じました。しかし、サウルのダビデに対する敵意は、募るばかりでした。サムエル記上の20章31節で、サウルは、息子ヨナタンに、

「エッサイの子が、この地上に生きている限り、お前もお前の王権も確かではないのだ。すぐに人をやってダビデを捕らえて来させよ。彼は死なねばならない」と言っています。

ヨナタンは、ダビデの身を案じ、ダビデを逃亡させました。そこからダビデの逃亡生活が始まりますが、何の用意も無いダビデは、祭司アヒメレクの許に行き、パンと巨人ゴリアトを倒して奪った剣を貰って、サウルのもとから、逃れました。サウルはもうダビデを見ないで済む訳ですが、それで、サウルの心が治まったかと言いますと、人間の敵意と言うのは、相手を抹殺するまで治まりません。そればかりか、相手に味方する者にまで、敵意は広がります。何とサウルは、事情も分からないで、ダビデに言われるままに、パンと剣を渡した、祭司一族の、皆殺しを命じたのです。これには、流石の家臣達も、神様を畏れる心を持っていましたから、王の命令といえども、神様に対して罪を犯す事は出来ませんでした。

そんな家臣たちの態度から、サウルもこの大罪に、気付いたかと言うと、彼は通報者であるエドム人ドエグを使って、この大罪を犯しました。たった1人アビアタルが逃げのびてダビデのもとに行きました。ダビデの下には、社会から追いやられた人々、400人が彼を慕って集まりました。そこでダビデは何をしたかと言いますと、ペリシテ人などの略奪から、住民の財産である羊や山羊、農業の収穫物を奪われないように、戦い守って、その報酬を得て、それで彼らを養ったのです。その後ダビデの下に集まって来た人は、600人になりました。

一方サウルは、ダビデの居場所が分かると兵

卒を率いてダビデを追いかけてきました。ダビデは荒れ野の要害へと、逃げざるを得ませんでした。死海の西側には、ユダの荒れ野と呼ばれる広大な荒れ地が広がって居ます。切り立った岩山が連なり、自然の洞窟が沢山あります。洞窟は大小様々で、数百人が入れるものもあります。ダビデの一行は、その様な所を居住にせざるを得ませんでした。しかし世間は、ダビデに同情する、者ばかりではありません。ダビデの居場所をサウルに通報して、自分たちの利益を図ろうとする人達もいます。サムエル記上

24章1節を見ますと、

「ダビデはそこから上って行って、エン・ゲディの要害にとどまった」とあります。

エン・ゲディは死海の西岸中央部に位置し、高さ185メートルの滝があり、小規模ながらオアシス地帯になっています。背後には険しい岩山が連なっています。ダビデの一行がそこに落ち着くと、またまた、その事をサウルに通報する者がいました。2節を見ますと、

「ペリシテ人を追い払って帰還したサウルに、『ダビデはエン・ゲディの荒れ野にいる』と伝える者があった。サウルはイスラエルのえりすぐった三千の兵を率い、ダビデとその兵を追って山羊の岩の付近に向かった。」とあります。

サウルの心の底には、何時もダビデに対する憎しみや嫉妬が渦巻いていました。それはマイナスのエネルギーですが、このマイナスのエネルギーは、とても大きく、大きな罪を犯させる力を持っています。人はマイナスのエネルギーを心に貯め込めば、必ず罪の実を生み出します。神様を信じ、神様に聞き従おうとしないサウルは、憎しみや嫉妬と言うマイナスのエネルギーを、神様によって追い出さないので、自分に抱え込んでしまった為に、自分の全勢力を注ぎ込んで、ダビデ抹殺に走り出しました。サウルは今度こそはと、三千の鋭兵を率いて岩山がそびえるエン・ゲディの山羊の岩と呼ばれ

る、(それは、山羊などの他は上る事が出来ない、断崖を意味している)ところに向かって、ダビデ捜しに進軍しました。

途中、羊の囲い場があり、そこには洞窟がありました。サウルは用をたそうと、その洞窟に入って行きました。明るい所から、暗い所に入って行ったサウルには、洞窟の奥が見えませんでした。奥の方には、ダビデと従者達が座っていたのです。その洞窟はきっと、雨の日などには、羊達を入れる場所になっていたのでしょう。サウルにしてみれば、奥に人が居るなど、それも、ダビデが居るなど、思ってもみないことでした。ダビデの家来は、侵入者はサウルである事が分かると、ダビデに向かって、

「主があなたに

『わたしはあなたの敵をあなたの手に  
渡す。思いどおりにするがよい』

と約束されたのは、この時のことです」

と勧めました。

ダビデもそう言われて、そうだと思ったのでしょう。静かに立ち上がり、サウルに気付かれないように近づくと、サウルの上着の端を密かに切ったのでした。ダビデは一つの決心をしていた様です。

『どんな事があっても、決して自分の手で  
サウルを討つ事はしてはならない』

と自分を戒めていました。ダビデは立ち上がった時から、

『上着の端を切るに止めておこう。それで  
自分にはサウルに対する敵意が無い事を示  
そう』

と、思ったでしょう。

『それなら許されるだろう』

と思ったでしょう。

しかし、いざ、その事を行うと、後悔の念が湧き上がってきました。7節に、

「兵に言った。

『わたしの主君であり、主が油を注がれた  
方に、わたしは手をかけ、このようなことを

するのを、主は決して許されない。彼は  
主が油を注がれた方なのだ。』

ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを  
襲うことを許さなかった」

とあります。それは、自分の命を狙っているサウルであるにも拘わらず、裁きを神様に委ねている心の表れでした。

ダビデがそれ程まで、神様に信頼していることに驚かされます。彼には神様は、約束を必ず果たして下さるお方だとの、深い信頼がありました。そして、もう一つは、サウルに対して、主が油を注がれた方だと言う、**神様が与えられた他者への尊厳**を決して忘れてはいませんでした。サウルが自分の怒りにまかせて、ダビデに好意を示した祭司アヒメレク一族を殺害した傲慢さは、**立って居る位置**が違いました。二人は神様の前に立っているのか、居ないのか、はっきりと分かれていました。

サウルが洞窟から出ていくと、ダビデも後に従い、背後から、

「わが主君、王よ」

と呼び掛けて、顔を地に伏せ、恭順の意を示しました。そしてダビデは、自分の本意を、切々と訴えています。12節から、

「わが父よ、よく御覧ください。あなたの上着の端がわたしの手にあります。わたしは上着の端を切り取りながらも、あなたを殺すことはしませんでした。御覧ください。わたしの手には悪事も反逆もありません。あなたに対して罪を犯しませんでした。それにもかかわらず、あなたはわたしの命を奪おうと追い回されるのです。主があなたとわたしの間を裁き、わたしのために、主があなたに報復されますように。わたしは手を下しません」

と言っています。

ダビデはここで、サウルに向かって語り掛けていますが、彼ははっきりと神様を意識し、神様の前に立って言っています。

『あなたは無益な事をしている。  
あなたに与えられている**使命は、  
そんな事ではない**でしょう。』

と言う意味で、15節に、

「あなたは誰を追跡されるのですか。  
**死んだ犬、一匹の蚤ではありませんか**」

と問い正して、16節に、

「主が裁き手となって、わたしとあなたの  
間を裁き、わたしの訴えを**弁護し、あなた  
の手からわたしを救ってくださいますように**」

と、サウルにも、

『**神様の前に立つように**』

と求めています。

サウルが洞窟に入って来た時は一人でしたが、外には、護衛の衛兵が待機していた筈です。ダビデはその状況で、サウルに声を懸けています。神様の守りを堅く信じていなければ、そのような事は出来ません。流石のサウルも、自分の非を認めざるを得ませんでした。サウルは声を挙げて泣き、18節、19節に、

「お前はわたしより正しい。お前はわたしに  
善意をもって対し、わたしはお前に**悪意を  
もって対した。**」

「自分の敵に出会い、その敵を無事に去らせる  
者があるろうか。今日のお前のふるまいに  
対して、主がお前に恵をもって報いて下さる  
だろう。今わたしは悟った。お前は必ず王  
となり、イスラエル王国はお前の手によって  
**確立される**」

と答えました。

ダビデの態度と言葉によって、サウルも神様の支配を考えざるを得ませんでした。そこで最後の願いは、自分の子孫が断たれる事が無いようにとの願いでした。ダビデがその事を誓うと、サウルは自分の館に帰って行き、ダビデは兵を連れて要害に上って行きました。サウルの本心を知るダビデは、サウルから更に離れざるを得ませんでした。この後ダビデは兵を率いて、略奪隊警備を続けます。そして、なお執拗に追跡してくるサウルの手から逃れるために、

ペリシテの地、ガトの王アキシユのもとに身を寄せます。

神様の時は、人間の思い通りに、すぐには来ません。しかし、神様に全信頼し、神様の前に生きて、神様の時を待つダビデに、神様は遂には、イスラエルの王位をお与えになるのです。実に、約束のものを得るには、**神様への信頼、信仰、そして、神様の御前に生き続ける事**です。しかし、私達もなんと、サウルの様に、目の前の状況や人の言葉に頼って行動している事でしょうか。神様に信頼し、神様の最善を信じ、神様の前に生きる事は、直ぐに答えが得られず、自分の不信仰と戦わなければなりません。

しかし、その信仰を持ち堪えたときに、神様は勝利をお与え下さいます。神様はその間、私達が、神様に**信頼し、ご自身の愛を信じて**生きるように、**訓練される**のです。そこを通らなければ、私達は、神様の**役に立つ**ことは出来ませんが、聖霊の助けを求めて、悔い改め、立ち帰りつつ、神様の御前に生きる事を求めて参りましょう。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

私達はあなたに愛され、守られていながら、ご自身の御前に生きようとはせず、サウルのように、自分の思いに振り回されている、不信仰な者です。それにも拘わらず、聖日毎に御前に**引き戻して下さり、有難う**ございます。

このご愛に答え、人の前ではなく、神様の御前に**生き、聞き従う者**とならせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。